

研究課題

知的支援学校における、自らかかわりを求める児童生徒を育成するための、AACを活用したコミュニケーション指導の研究

副題

～「支援パッケージ」開発の一環としての、初期レパトリー獲得分野に焦点をあてて～

学校名 岡山県立東備支援学校 AAC活用を考える会

所在地 〒705-0013
岡山県備前市福田637

学級数 26

児童・生徒数 119名

職員数/会員数 45名

学校長 福田 由理子

研究代表者 浦池 聡子

ホームページ
アドレス <http://www.tobiযোগ.okayama-c.ed.jp/tobiyo/htm>



1. はじめに

本校は小学部・中学部・高等部を持つ知的障害の支援学校である。近年は自閉症など発達障害の児童生徒が増加しており、精神遅滞による言語発達の遅れに加え障害特性からくる人とのかかわりの特異性や発達の偏りがあり、コミュニケーションにおける潜在的なニーズを持っている児童生徒が非常に多い。

このような実態や ICF の障害者観の転換の流れの中で、AAC（拡大・代替コミュニケーション）は重要なコミュニケーション手段として位置づけられ、本校でもこれまで、サインやシンボルとしてのカード、VOCA（音声表出コミュニケーション支援機器）などが活用されてきた。しかし担任による個別の取り組みに任されてきた部分が多く、例えば一人の児童生徒の発達段階や成長に従っての AAC 方略の変化など、障害のある児童生徒に対する一貫したコミュニケーション支援についての情報が共有されることはなかった。そこで、知的支援学校における小学部から高等部までの一貫した「コミュニケーション支援パッケージ」の開発に取り組みたいと考えた。

2. 研究の目的

小学部から高等部までを見通した、社会的妥当性のある「コミュニケーション支援パッケージ」の開発を今後3年間で行っていくことを目標とし、今年度はその一環として音声言語が見られず発信手段を持たない段階の児童生徒のコミュニケーション支援に焦点をあてた。ビギニングコミュニケー

ターとしての彼らが「自らかかわりを求める」ことができる AAC 方略や指導のステップについて、VOCA の活用を中心に研究を進めることにした。

3. 研究の方法

本研究の対象者は本校在籍の児童生徒で、対象は学校生活全般とした。

- 研究組織を立ち上げ、研究組織内のメンバーを中心に AAC の活用に関する実践を行う。
- 研究組織内で実践の評価や、AAC に関する情報の収集を行う。
- 活用した機器やツール、介入や支援方法などについての実践事例をまとめ蓄積していく。
- まとまった事例等の情報を、校内研修等で提供する。
なお研究を進めていくうえで、次の点もめざしながら行った。
 - ・学校全体において AAC についての基本的な知識を共有する。
 - ・校内の限られた機器を活用しながら、新しい機器についても研究し取り入れていく。
 - ・教材や機器を学校全体で共有し、デジタルデータや機器の扱いに慣れる。

4. 研究の内容

今回の研究の二つの大きな柱は、①具体的に抽出した事例によって、初期コミュニケーションスキルの確立やレパト

り獲得のための方略を創出し、「コミュニケーション支援パッケージ」の開発につなげる。さらに②AACの考え方や活用の仕方について学校全体に自然な形でその普及をはかることであり、次のように進めた。

(1) 対象とする児童生徒や学習集団の選定と VOCA の選択

コミュニケーションの実態やニーズを把握するためにアセスメントを行い、小学部から4名、中学部から1名、高等部から3名の児童生徒を抽出した。VOCAの選択については、「ATAC 京都」「ATAC 香川」などでの情報収集も行いながら、生活年齢や活用経験、自立や社会参加といった観点などからも検討した。

(2) 指導場面の選択と実践

児童生徒の学校生活の中で、①日常生活の指導における給食や着替えの場面 ②遊びや児童生徒が興味を持って取り組む活動場面 ③学習における教師への依頼や報告の場面 ④役割を果たす場面や作業学習などを中心に、コミュニケーションが生じやすいような環境的文脈を意図的に組み込み、アセスメントから検討された AAC 方略を活用して指導を行った。なおアセスメントは、「LC スケール」を参考に、担任による行動観察を中心に行った。

(3) 実践の評価・まとめと情報提供や校内研修の実施

児童生徒のコミュニケーション行動の変化や VOCA 活用の効果について観察・評価・まとめをし、校内への提供を行った。またコミュニケーションや AAC に関する研修会を実施した。

5. 研究の経過

(1) 指導場面での実践

①着替えの場面での活用

Aさんは音声言語による意思伝達はないが、自分に話しかけられる言葉は理解でき、要求は主に指さしやジェスチャーなどで伝えることができた。しかし学校でも家庭でも、自分から積極的に周囲に働きかけることはあまりなく、働きかけのタイミングがつかめないといった様子が見られたので、「自分から伝えようとする」姿を目標として、Lingo (VOCA) を導入した。最初は担任の顔写真のボタンを押すと「せんせい」と音が出ることを知らせ、Aさんが押して「せんせい」と発信すると教師がすぐに返事をし、コミュニケーションの手段であることに気づかせた。家庭でも何度も「おかあさん」と発信して返事をしてもらおうと嬉しそうな表情が見られるようになり、自分から Lingo を使って呼びかける姿が多くなってきたので、次に着替え場面での活用に取り組んだ。一人ずつめられないボタンがある時に「せんせい」「てつだってください」と発信したり、「せんせい」「できました」と報告した



りすることができるようになり、学校生活の他の場面においてもレパトリーを増やしていくことができた。

②給食場面や「おやつタイム」での活用

Bさんは音声表出言語がなく、給食時には自分の好きな食べ物に手を伸ばして食べようとする様子が見られた。そこで、食事のおかわりやおやつ場面を自発的なコミュニケーションを最も引き出しやすい場面と捉え、食べ物を手にする前に横の教師がBさんの手を取ってワントークス (VOCA) のボタンを押すことを教え「ください」と発信させてから、おかわりやおやつを渡すようにした。伝えたいという意欲が見られるようになり、そのうちおかずやごはんなどの絵カードと組み合わせて要求を伝えることができるようになった。取り組みを始めてから半年過ぎた頃から、小さな声ではあるが「ください」と発声して表現できるようになった。



Cさんはトーキングエイドで文字キーを押し「みかん」「ぐらたん」など発声させておかわりを要求することに取り組んだ。課題学習の時間に、給食に出てくるメニュー名のひらがなや「へらしてください」の文字を学習することにより、さらに自信を持って伝える姿が見られるようになった。



③遊びの場面での活用

好きな遊びをもっと続けてほしいという要求をする場面、あるいは好きな玩具や絵本を要求する場面でも VOCA を活用した。子どもが好きな手遊びなどの場面で遊びを中断し、もう1回やってもらいたいという意思表示があった時には VOCA を押すように導き、「おねがいします」と発信させてから遊ぶようにした。好きな玩具を選び、「ほん」「ねんど」など VOCA を使って要求するうちに、「ほん」などの音声表現が見られ出した児童もいた。



④役割を果たす場面での活用

号令などをかける場面や朝の会の司会等の場面で VOCA に「起立」「礼」「着席」「今日の予定の発表です」などの音声を入れておいて授業の前後や集会などで使うと、自分のかけ声で周囲の人が一斉に動くということに意欲が高まる様

子が見られた。また、「健康観察」などの係活動や中学部・高等部での作業学習でも積極的に活用するようにした。特に高等部では、多様な機能を備えたトークアシストや携帯電話、iPod などを取り入れたことにより、スケジュール管理やタイマーのツールとしても活用できたなど、自立に向けての支援にも役立った。



(2) 校内研修の実施（全6回）

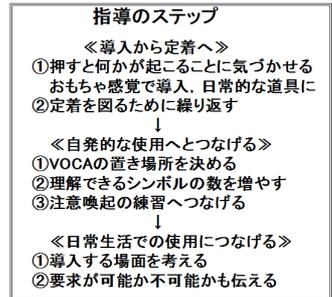
坂井聡先生（香川大学教育学部准教授）に児童生徒へのコミュニケーション支援についてコンサルテーションを受け、4回の研修を行った。また家庭でのコミュニケーション支援について、保護者を対象とした研修会を開催した。

夏季休業中には小西順先生（大阪府立堺支援学校教諭）を講師に、電子機器の使い方や AAC 活用の際に授業の中で児童生徒の意欲を高めていく具体的な支援についての研修を行った。

6. 研究の成果と今後の課題

VOCA の使用を通し「伝わる」ということの便利さやおもしろさを児童生徒が感じることができ、コミュニケーションしようという意欲につながっていくことができた。音声表出ができない場合にも、伝わる便利さを知りコミュニケーションを楽しむことができるようにと考えて支援をすることが大切なのだという「気づき」を教師側も得ることができた。また、シンボルなどの理解にもつなげることができ、ほとんどの児童生徒が理解できるシンボルの数が増え、「ほん」「おわり」などの言葉について理解のなかったものを、3～4ヶ月がたった時点から 10 個程度の単語にまで拡大していった児童も見られた。「ください」「せんせい」など音声の表出についても変化が見られ、発信の拡大が単に理解を広げていくだけでなく、記号や音声の表出的使用も生み出すことがわかった。そしてこのような取り組みの過程で、我々教師のアセスメント力や児童のコミュニケーション行動をとらえる際

の視点の拡大、評価の観点などを得ることもできた。このような事例の蓄積と、指導のステップをまとめることができたことが、「コミュニケーション支援パッケージ」の開発に向けての小さな一歩と考えている。



課題として、今後 AAC の介入を進行していく際に、どのように理解と表出の2つの側面を盛り込んでいくかという点がある。AAC システムは、これまで基本的に要求、感情等を表現するといった話し手としての出力モードを提供してきた。しかし、コミュニケーションにおいて表出だけが単独で成立するというものではなく、個人がメッセージの受け手としての役割も期待されている。児童生徒のコミュニケーション発達のプロセスにおいて、理解と表出の導入順序や関係性がどうあったらよいのかという点や、コミュニケーションの段階として、発話産出のスキルが改善されるにしたがって、徐々にツールとしての AAC を消去していくというような、より積極的なアプローチがあるのではないかとこの点についても研究の必要性を感じているところである。

7. おわりに

今回の取り組みはまだ緒についたばかりであり、「コミュニケーション支援パッケージ」の開発にはまだまだ遠い道のりがあるが、自らかかわるということを苦手としていた児童生徒が、生き生きとコミュニケーションを楽しみ始めた姿に感動を覚えた。今回の実践を次につなげて、障害のある児童生徒が将来的に地域生活において人々とやりとりを楽しむことにつながっていくようなツールについて考えていきたいと思っている。

最後になりましたが、研究助成くださいましたパナソニック教育財団のみなさまに深く感謝いたします。

参考文献

- ・「言語・コミュニケーション発達の理解と支援プログラム—LC スケールによる評価から支援へ—」 大伴潔 他 著
- ・「特別支援教育における AT を活用したコミュニケーション支援」 金森克浩 編著